

「港南台九条の会」の例会と「栄区九条の会」の学習会で、話す機会を与えられた。牧師として、宗教、平和、憲法について思うことを私の言葉で自由に話させていただいた。多くのことを話したが、その要約を紹介したい。

イエス・キリストはサタンに幾つかの誘惑を受けた。その一つに、サタンはキリストに地上の栄華を見せて「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう」と誘った。キリストは「退け、サタン。あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と言って、サタンの誘惑を退けた。古代人は抽象的な概念で説明しないで、我が世の春を謳歌している人は、魂をサタンに奪われていると神話的に表現するということである。古代から現在まで、独裁者たちは権力を握り、権勢を振り回し、栄華を手中にした。しかし、反対側では、人間の尊厳を踏みにじり、虫けらのように扱い、何千、何万の人を殺しても、意に介さない。このような独裁者はサタンにひれ伏し、サタンを拝む者であると警えている訳である。この神話は、私たちと関係のない遠い話ではない。国の形、社会のあり方、人間の生き方は、憲法に規定、保障されているが、その憲法はどのような憲法であるか。国が国民を管理、支配するなら、人間の尊厳は守られず、サタンの思うつぼにはまる。国民が国を監視し、権力の暴走を阻む憲法であるなら、人間の尊厳は守られ、平和が構築されていく。日本の憲法は、後者の国民主権を謳っているが、その憲法を守り、実行するためにどのように責任を果たしているか。キリストとサタンの会話はこのことを問い掛けている。

最近、米国のキリスト教原理主義と言われる福音派教会、ロシア正教、統一教会がメディアで取り上げられている。福音派教会は、聖書を尊重し、一見「敬虔なクリスチャン」で、米国の保守政党を支えている。彼らは、「逐語靈感説」に立ち、聖書の言葉は全て、神の靈感によって書かれ、一字一句が真実であると信じている。イスラエル人は神から選ばれた選民で、その先祖アブラハムにカナン（イスラエル）の地を彼と子孫に与えると書いてある。だから、イスラエルの地はイスラエル人のもので、住んでいたパレスチナ人は出て行けと、赤子の手を捻るように、虐殺、圧制の下に置いている。四千年前、アブラハムに語ったとされる言葉を現代に通用させる非科学的信仰は通用しない。聖書は、人類史に大きな影響を与えた文書に間違いはないが、古代文書だから、歴史的・科学的な読み方が求められる。「敬虔なクリスチャン」の裏側で、人間否定の現実を凝視すべきである。

ロシアのプーチン大統領は、主権国家ウクライナに軍事侵攻し、国境線を書き換える暴挙に出た。これが通用したら、強い国の思い通りになり、国際秩序は保てない。戦死者は増え、ウクライナ人の生活は困窮し、世界の経済に混乱を来たさせた。環境崩壊をも引き起こし、温暖化に拍車をかける状態で、とても承服できることではない。ロシア正教会は、プーチン大統領の権力と一体化している。モスクワ大司教のキリルー世は、「ウクライナで戦い、戦死すれば、これまでの罪が赦される」と語り、プーチンのウクライナ軍事侵略を宗教的、精神的に支えている。天皇、国のために死んだ者は靖国神社で英霊・優れた霊として祀られると、戦意を高め、兵士を戦場に送り出す靖国思想と同じである。人の死は権力で、価値づけてはならないが、ウクライナでの戦死を贖罪死と位置づけるほど、ロシア正教は、聖書とは離れて、プーチン政権を支える力となっている。宗教的墮落である。

統一教会は、韓国の文鮮明が興した、キリスト教の新興宗教である。勝共思想が根幹で、韓国の軍事政権時代は勝共一辺倒であった。米国の共和党大統領たち、日本の岸信介元首相らと関係を深めていった。安倍晋三元首相の殺害事件後、旧統一教会が政界に食い込ん

でいる状況が明るみになり、驚き入っている。彼らのイデオロギーは、憲法を変えて軍備の拡張と家族教育の実施である。現政権に於いても、ロシアのウクライナ侵攻と相まって、軍拡は当然のような論調になってきた。家族教育は、古い家父長的家族を是とし、ジェンダーフリーを認めない。家父長制は、天皇は男であるとする家族観と繋がっている。

統一教会の宗教的問題は、地獄、悪霊、先祖の因縁などと不安と恐怖を煽り、それからの免罪として、多額の献金で救われるとしている。戦時中の朝鮮支配の償いとしての献金も当然のこととしている。宗教、信仰は喜びがあるから、平安を与えられる。生きる希望と勇気が与えられるから、信じるのである。恐怖を煽って信仰に導くのはカルトである。カルトに支配されるところには、喜び、平安はなく、人権侵害があるだけである。

ドイツにヒトラーが台頭した時、「イエス・キリストは我々の生と死において信頼し、服従すべき神の唯一のみ言葉である」と告白した「バルメン宣言」に基づき、ヒトラーへの不服従を貫くドイツ教会闘争が展開された。戦後、教会はドイツ教会闘争を担った人々が教会を指導した。この延長線上で、ヴァイツゼッカー大統領は、「荒れ野の40年」という講演で、ナチズムが犯した罪を列挙し、過去に目を閉ざす者は現在が見えないと語った。

日本基督教団も紆余曲折しながら、1967年に「戦争責任告白」を公にし、戦争に加担したこと、アジアの諸国を傷つけたことを謝罪し、平和への決意を新たにした。過去の過ちを認めることを「自虐的」と言って、歴史を改ざんしようとする勢力もあるが、過ちを謝罪することは高い精神性であり、赦しに繋がり、和解、共生、平和を生み出していく。

日本は、310万人の戦死者を出し、国民は塗炭の苦しみを経験した。日本の侵略戦争によって、アジア諸国では2000万人以上、日本の7倍の犠牲者を出し、人権を著しく蹂躪した。日本は、もう戦争はしないと不戦の憲法を作り、国民は大歓喜して受け入れた。この憲法は、アジア諸国への謝罪、贖罪的な意味をも持っている。そのように受け止める時、憲法は世界史的な意味を持ち、世界に平和を発信できるとものとなるのではないか。

宗教は、人間を超えた方を信じ、結びつく精神的な営みである。人間を超えた方を「神」という言葉で表すとすれば、神と向き合うと、まず私であること、どんなに小さくとも「私は私であっていい」というアイデンティティを確保できる。人や教理に洗脳されたり、権力に心を奪われることのない私自身を見出す。次に、神を信じる時、自分は有限な相対的な人間であることを知らされる。神だけが絶対で、自分は塵のような存在であるから、謙遜に他者と共に生きることを望む。この信仰は地上のものを絶対視、聖性視しない。地上のものを神とする時、そのものの奴隷となる。戦時中、日本人は天皇を現人神とし、天皇の奴隷となって生と死を献げる狂気の時代を過ごした。自分を確立し、自分を相対化する時、「生の絶対的是認」という信仰に至る。生きることを「よし」とされ、互いの生を絶対的に是認し合うところに、平和を構築する道が開かれてくる。この考えは、宗教者、非宗教者に関わりなく、共通の理念として受け入れられるのではないか。

紀元前8世紀、預言者イザヤは「剣を鋤に、槍を鎌に打ち直す。もはや戦いを学ぶことはない」と、武器を農具に変え、戦争をしないと語っている。イザヤの言葉は国連の建物の壁に刻まれ、人類の希望となっている。武器を持たず、戦争しないという日本の憲法は、イザヤの言葉に原点がある。現在、日本も世界も、戦争に怯え、気候変動に悩み、息苦しさの中にある。しかし、九条の会に関わっている人はそれぞれの考えで、平穩に生きる喜びを分かち合うことを求めている。私も神信仰から導かれた「生の絶対的是認」に立って、平和を追う希望の歩みを皆さんと共にしたいと願っている。